

Hécatombe à Diane の世界

浜 田 明

デュ・ベレー、ロンサールらプレイヤード派の詩人達によって、1549年以後、恋愛ソネ集がフランスで流行する。ギリシャ、ローマの詩人に加え、『カンツォニエーレ』の詩人ペトラルカ、及び彼の影響を受けたイタリア詩人達にフランスの詩人達が学んだ結果、数多く書かれた当時の作品には、共通の主題、モチーフ等が認められる。したがって、ある作品の独自性を明らかにするために、source と考えられる作品、または同時代の類似した他の作品と比較を行うことは有意義であり、アグリッパ・ドービニエの *Hécatombe à Diane* に関しても、他の詩人の作品を引用、言及した H. Weber による批評版が存在する⁽¹⁾。

またこの百編のソネ集が、ディアヌ・サルヴィアチという女性との恋愛から生まれたことが自伝によっても知られているとは言え⁽²⁾、抒情詩として存在するテキストから歴史的事実としての彼らの恋愛を再現することは困難である。したがって本論においては、個々のソネの独自性や語られている恋愛の内容よりも、語り手が恋愛の意識をどのような表現によって作品化しているかを分析することで、このソネ集全体の世界を呈示することを目的とする。

恋愛ソネにあっては、語り手の内面や、恋愛感情の対象である女性、または両者の関係についての言葉が恋愛詩としての意味の中心となるわけであるが、そのような恋愛の世界を指向する言葉によって、直接恋愛が語られる場合もあれば、恋愛の世界とは、一見異質な世界を呈示することからソネがはじまる場合もある。

最初に直接恋愛の世界を語る例を見よう。

XXXVI

Tu m'avois demandé, mignonne,

(1) *Le Printemps, L'Hécatombe à Diane et les Stances*, édition critique par H. Weber, Paris, Presses Universitaires de France, 1960.

(2) *Sa vie à ses enfants* in *Œuvres*, édition par Henri Weber, Bibliothèque de la Pléiade, 1969, pp. 394–396.

De Paris quelque nouveauté.
 Le nouveau plaist à ta beauté,
 C'est la nouveauté qui m'estonne.
 Je n'ay veu depuis ta personne
 Rien qui doive estre souhaitté,
 Ainsi je n'ay rien apporté
 que ce cristal que je te donne.
 Que di-je, je ne pouvoy' mieux
 Pour monstrier ensemble à tes yeux,
 Mon feu, ta beauté merveilleuse.
 C'est nouveauté! tu n'en crois rien,
 J'espere que par ce moyen
 De toy tu seras amoureuse.⁽³⁾

ここでは、女性が贈り物を頼み、それに対して、〈私〉が応えるという形で、恋愛が二人の共同行為として語られ、《mignonne》と言った呼びかけは、親密さを示している。女性の視線を映す鏡も、まずはパリからの贈り物としてディアヌと〈私〉を結びつける役割を果たしている。同様にディアヌとの関係が日常的な世界の中で表現されているソネが他にも存在する。〈私〉がディアヌの肖像画を求めたり（ソネXXⅢ）、二人の乗った馬車が倒れたり（ソネXXX）、からませた指の思い出（ソネXXXV）等において、二人の関係は日常的な世界における恋愛関係として語られている。もちろん現実にもそういった出来事があったかどうかは判断出来ないし、重要ではない。確認しておくべき事は、日常的に有り得ると想定される出来事によって、ソネが成立、もしくはソネの書きはじめられているということだ。

次は恋のはじまりを回想するソネである。

LXIV

Je ne sçay si je doy estimer par raison
 Le jour et la saison ou contraire ou heureuse

(3) 本文引用は次のテキストに依った。

Le Printemps, L'Hécatombe à Diane, avec une introduction de Bernard Gagnebin, Droz, 1948.

ローマ数字にて、ソネの番号を示した。

Que je vy de ses yeux la flamme gracieuse
 Empoisonner mes sens d'une douce poison.
 Ses deux soleilz me font heureux en la prison
 Où loge la douceur et la peine engoisseeuse,
 Mais telle qu'elle soit, ou douce ou ennuyeuse,
 De la source du mal, j'espère guerison.

このソネに含まれるいくつかのメタフォールによって、恋のはじまりを語り手がどのように認識しているかを知ることが出来よう。《douce poison》といった撞着語法や、《heureux en la prison》との逆説的な表現によって、不安定でアンビヴァレントな状態であり、理性が正常に機能しない、また《guerison》という語が示すように病気である状態として、恋愛は認識されている。恋愛を牢獄《prison》や病気にたとえるメタフォールはソネ XVI, XLVI, XLIX, LV II, LXXXVI にも見られるように個別的に創意されたメタフォールでなく、所謂ペトラルキスムが持つ《registre》に依るものである⁽⁴⁾。4行目の《poison》と《empoisonner》と同様に、ソネ LXXXVI では、《prison》という語と共に、《chaine》、《enchaisna》という表現が使用されている。

女性の美しさを称える際には、貴金属、花をメタフォールとして用いることになる。

XXV

Que je soy' donc le peintre, il m'a quitté sa place,
 Rengainé son pinceau: je veux bien faire mieux
 Qu'en un tableau mortel, qui bien tost sera vieux
 Et qui en peu de temps se pourrit et s'efface.
 Je pein ce brave front, empereur de ta face,
 Tes levres de rubis, l'or de tes blonds cheveux,
 L'incarnat de ta joue et le feu de tes yeux,
 Puis le sucre du tout, le lustre de ta grace.

画家に代わって、自らがディアーンヌの姿を描くと宣言し、二番目の四行詩節で、《Tes levres de rubis》、《l'or de tes blonds cheveux》など鮮かな描写を展開している。これらの女性を賛美するためメタフォールを新たに詩人が発明する必要はない。伝統的に

(4) Gisèle Mathieu Castellani, *Les thèmes amoureux dans la poésie française (1570-1600)*, Paris, Klincksieck, 1975, pp. 32-43.

使われている例から、ふさわしいイメージを選び出すことが必要なのである⁽⁵⁾。

しかし、こうした色彩の類似性によるメタフォールは、単に女性の美を表現するために用いられるだけではなく、ソネの展開に大きな役割を果たす場合もある。

LXVIII

Cest esthomas de marbre est-il pas suffisant
 Pour monstrier que le cœur qui la dedans s'emmure
 Comme luy est de marbre et d'estoffe plus dure
 Qu'un roc invariable, endurcy et pesant ?
 J'ayme bien la beauté du marbre reluisant,
 Mais je n'y puis graver ny terme, ny peinture,
 Tableau saint où mon nom servira de figure,
 Sois dur à l'effacer ainsi qu'en l'incisant.
 Car si les diamantz se gravent par les eaux,
 Et si on voit les rochz fenduz par les ruisseaux,
 Si du borgne Affricain le soin, les feux aussi,
 Parmi les rochz brisés firent chemin aux armes,
 Je graveray mon nom sur ce cœur endurcy,
 Le bruslant de mes feux, le mynant de mes larmes.

一行目で、ディアヌの胸の《esthomas de marbre》という色彩、光沢から導かれたメタフォールが、《cœur》という内面に、すなわちディアヌの心のかたくなさを形容することになる。《marbre》の色彩より硬度に焦点が当てられたことで、三行詩節においては、《diamantz》《rochz》ら新たなイメージが導入される。メタフォールの使用により、視覚から触覚へ、ディアヌの外表面から内面への移行が可能になったわけである。ディアヌの肌の白さを称えながら、同様に視覚から味覚へと、ディアヌとの距離を失くしより直接的な感覚へ移行する例は、ソネ XLII に見られる。

以上、直接恋愛の世界を語るソネの例を考察した。ディアヌと〈私〉にとっての共同の行為や、日常的な出来事を語る際にはともかく、恋に落ちた自己の内面を表現し、ディアヌの美しさを称え、またはディアヌの〈私〉に対する態度を語る際の、メタフォールの働きを確認しておきたい。

(5) Fernand Halpin, *Formes métaphoriques dans la poésie lyrique de l'âge baroque en France*, Genève, Droz, 1975, pp. 93-94.

次の、恋愛の世界とは一見異質な世界を呈示することからはじまるソネについては、二つに分けて考えられる。途中から恋愛の世界が現われてくる場合と、ソネ全体が恋愛と異質な世界である場合との二つのパターンがある。

前者、すなわち恋愛と異質な世界の呈示にはじまり、ソネの途中で恋愛の文脈が現われてくる例をまず挙げる。

XC

Un clair voyant faucon en volant pour riviere
 Planoit dedans le ciel, à se fondre appresté
 Sur son gibier bloty. Mais voyant à costé
 Une corneille, il quitte une poincte premiere.
 Ainsi de ses attraictz, une maistresse fiere
 S'eslevant jusqu'au ciel m'abbat soubz sa beauté,
 Mais son vouloir volage est soudain transporté
 En l'amour d'un corbeau pour me laisser arriere.
 Ha! beaux yeux obscurcis qui avez pris le pire,
 Plus propres à blesser que discretz à eslire,
 Je vous crain abbatu, ainsi que fait l'oiseau
 Qui n'attend que la mort de la serre ennemie,
 Fors que le changement luy redonne la vie,
 Et c'est le changement qui me traine au tombeau.

冒頭の四行詩で、恋愛とは異質な世界である隼が獲物を狙う時の行動を描写し、二番目の四行詩節で、恋愛の文脈を示す表現が現われる。5行目の《ainsi》という語が示しているように、最初の四行詩が *comparant*、次の四行詩が *comparé* として、全体でひとつの *comparaison* を形成していると考えられることも出来よう。《*comparaison développée*》と呼ぶこともあるようだ⁽⁶⁾。短いコンパレゾンではなく、このような形を取ることで、単なる属性ではなく、一連の行動の類似を呈示することが可能になる。一人の女性に捧げられたソネにおいては、この種のコンパレゾンは、語り手が女性を説得するための例証としての機能をまず持つと考えられる。また、二番目の四行詩節で恋愛の世界が語られるが、冒頭の四行詩節で使用された恋愛と異質な語彙が次の四行詩節に入り込み、《*maistresse*》を

(6) *Ibid.*, p. 44, 及び François Rigolot, *Le texte de la Renaissance*, Genève, Droz, 1982, p. 188.

受けての6行目では、《S'eslevant jusqu'au ciel》とある様にメタフォールを形成させている。

さて、この *Hécatombe à Diane* にあつては、戦いに関するイメージを含むソネが、VII から XVI まで連続している。

XIV

Je vis un jour un soldat terrassé,
 Blessé à mort de la main ennemie,
 Avecq' le sang, l'ame rouge ravie
 Se debattoit dans le sein transpercé.
 De mille mortz ce perissant pressé
 Grinçoit les dents en l'extreme agonie,
 Nous prioit tous de luy haster la vie :
 Mort et non mort, vif non vif fust laissé.
 《Ha, di-je alors, pareille est ma blesseure,
 Ainsi qu'à luy ma mort est toute seure,
 Et la beauté qui me contraint mourir
 Voit bien comment je languy à sa veue,
 Ne voulant pas tuer ceux qu'elle tue,
 Ny par la mort un mourant secourir》.

このソネの場合、二つの四行詩節で戦場に倒れ伏し、瀕死の重傷を負った兵士の描写が繰り返され、三行詩節に入って、《pareille》という語が示すように、兵士と同じように恋愛の傷を負っている自らの心情が述べられている。一般的な論証のためにコンパレゾンを使用するならば、選ばれる事例は客観性を備えた方がよい。例えば、四季の移り変わりが自然の法則として、ソネ LXXXII から LXXXVI まで使われている。ソネ XIV の場合、四行詩節で呈示されている世界は、一般的な現象などではなく、語り手が兵士の姿を見、《Je vis》兵士の声を聞いている《Nous prioit》。兵士と語り手は単なる類似以上の共感によって結びつけられ、語り手は恋愛と異質な世界を呈示するだけでなく、その世界の中の登場人物になっている。二つの四行詩節に見られる宗教戦争の情景から得られた描写は、具体的なイメージに満ちているが、同様に凄惨な宗教戦争の光景をコンパレゾンに取り入れたソネが、百編の恋愛詩の中で、VIII、IX、X、XII とあることは注目に値する。

ソネ XC、XIV のソネでは、はじめに恋愛と異質な世界を呈示し、その後で《ainsi》

とか、《pareille》といった語によって、恋愛の世界を語る手法が取られたが、次はソネ全体が、恋愛とは異なる世界によってつくり上げられている例を考察する。*Hécatombe à Diane* のはじめの3つのソネは、いずれも嵐の海を小舟がさ迷う情景を描いている。

II

En un petit esquif esperdu, malheureux,
 Exposé à l'horreur de la mer enragée,
 Je disputoy' le sort de ma vie engagée,
 Avecq' les tourbillons des bises outrageux.
 Tout accourt à ma mort: Orion pluvieux
 Creve un deluge espais, et ma barque chargée
 De flotz avecq' ma vie estoit my submergée,
 N'ayant autre secours que mon cry vers les cieux.
 Aussitost mon vaisseau de peur et d'ondes vuide
 Receut à mon secours le couple Tindaride!
 Secours en desespoir, oportun en destresse.
 En la mer de mes pleurs porté d'un fraile corps,
 Au vent de mes souspirs pressé de mille morts
 J'ay veu l'astre beçon des yeux de ma deesse.

一見すると、このソネ全体が難破にさらされる小舟の航海を叙述しているようだが、このソネ集が恋愛詩集である以上、嵐の海の航海を恋愛の象徴して読むことが迫られる。また、このソネIIにおいては、12行目に《la mer de mes pleurs》と恋愛の世界との関係を表す言葉がメタフォールの形で示されている。愛にとらわれている内面の不安が嵐の光景で表現され、星に導かれ港に着くことは愛の苦しみ後の安らぎを象徴する。ソネIIは、恋人の眼を見ることが出来るが、ソネI、IIIでは舟人である〈私〉は、難破してしまう。恋愛を航海にたとえることは、様々な詩人によって試みられたとしても⁽⁷⁾、ドービニエの書いた三編のソネがいずれも航海を時間の流れに従って叙述するというよりも、語り手の難破する寸前の叫びに焦点を合わせていることは注目すべきであるし、冒頭の三編のソネがこのように切迫した調子ではじまることで、読者を一気に*Hécatombe à Diane*の世界に引き込む役割を果たしていると言えよう。

(7) Henri Weber, *La Création poétique au XVI^e siècle en France*, Nizet 1955, pp. 295-304.

ソネ全体を恋愛と異質な世界で表現している例としては、他に Amour と Fortune の戦い (ソネ VII, VIII), 愛の法廷 (ソネ XLV, C) 愛の道 (LV) などが挙げられよう。表面上の叙述の世界の下に、別の世界を隠す手法はレトリックの用語で言えば *allégorie* と呼ぶのが適当であろう。

さて、愛の航海のソネは、*Hécatombe à Diane* の冒頭を飾ったが、愛の法廷のソネは、XIV, C の2つが存在する。ソネ XIV では、被告人は *raison* と対立する *amour* であるし、詩句の調子も軽い。ソネ C では様相は一変する。

C

Au tribunal d'amour, après mon dernier jour,
 Mon cœur sera porté, diffamé de bruslures,
 Il sera exposé, on verra ses blesseures,
 Pour cognoistre qui fit un si estrange tour.
 A la face et aux yeux de la celeste cour
 Où se preuvent les mains innocentes ou pures,
 Il seignera sur toy, et compleignant d'injures,
 Il demandera justice au juge aveugle Amour.
 Tu diras: C'est Venus qui la fait par ses ruses,
 Ou bien Amour, son filz. En vain telles excuses!
 N'accuse point Venus de ses mortels brandons,
 Car tu les as fournis de mesches et flammesches,
 Et pour les coups de traict qu'on donne aux Cupidons,
 Tes yeux en sont les arcs, et les regards les flesches.

被告人は今やディアースであり、告訴人であろう〈私〉は、もはや生命ある者として存在していない。人間としてではなく、《Mon cœur》がディアースに向かって血を浴びせることで、ディアースの罪を告発しようとする。ディアースの心変わり、つれなさを嘆き、言葉を尽くしてディアースの気持ちを変えようとした〈私〉が、詩集を閉じるこのソネにいたって、ディアースに呪いの言葉を投げかけるのだ。

以上の引用とその分析で、*Hécatombe à Diane* における恋愛の語り方についておよそのパターンを見てきたが、簡単にもう一度整理をしてみよう。

まず、ソネ XXXVI では、ディアースへの贈り物といった日常的な事物を通してディアースと〈私〉の関係は語られ、二人の関係も共同的で日常的世界の中に描かれた。

次にソネ LXIV は恋愛状態にある語り手の内面が、ソネ XXV では、ディアースの美し

さが、メタフォールをまじえながら語られたが、それらのメタフォールは文学的な伝統の《registre》に属するものながら、ソネ LXVIII は、そこからの変容を示す例であった。

ソネ XC 以下は、恋愛と異質な世界を呈示することからソネがはじまるものだが、comparaison と allégorie に大別出来た。両者の用法それ自体は、何ら特殊なものではないが、comparaison の場合は、外界の具体的な事象を恋愛の comparant に語り手が選び取る際に、宗教戦争から独特の comparant を使用していた。

またアレゴリーも、恋愛と航海、戦い、法廷の結びつきはすでに存在していたにせよ、詩集の最初に航海、戦い、そして最後に法廷といずれも具体的な描写に満ちた非日常的世界を現出させる働きをした。

以上のように、日常と非日常両方の面を持つ多様な世界が *Hécatombe à Diane* の世界である時、その世界の多様性を具現する存在がディアースであることを付け加えておこう。ディアースはソネ XXXVI で、《mignonne》と呼ばれ、語り手に身近な存在であることもあれば、女神と同じ名前であることから、残忍な狩人の女神（ソネ XXI）になることもある。明らかにディアースが女神として現れる頻度は少いとしても、（ソネ XXI, XXII, XXXVII, LXXXVIII, XCVI, XCVII）その印象は強い。女神の属性によって、人間としてのディアースの性格が説明されることもあるだろう⁽⁸⁾。しかし最も印象的なのは、自らを詩人と考え、詩こそが、ディアースとの最大のコミュニケーションの手段と考えていた語り手の詩編が、生贄として燃やされるソネ XCVI である。

XCVI

Je brusle avecq' mon ame et mon sang rougissant
 Cent amoureux sonnetz donnez pour mon martire,
 Si peu de mes lancements qu'il m'est permis d'escire
 Souspirant un Hecate, et mon mal gemissant.
 Pour ces justes raisons, j'ay observé les cent:
 A moins de cent taureaux on ne fait cesser l'ire
 De Diane en courroux, et Diane retire
 Cent ans hors de l'enfer les corps sans monument.
 Mais quoy? puis-je cognoistre au creux de mes hosties,
 A leurs boyaux fumans, à leur rouges parties
 Ou l'ire, ou la pitié de ma divinité?

(8) Gisèle Mathieu Castellani, 《La figure mythique de Diane dans l'*Hécatombe* d'Aubigné》, in *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, 1978, No. 2. pp. 3--18.

Ma vie est à sa vie et mon ame à la siene,
Mon cœur souffre en son cœur. La Tauroscytiene
Eust son desir de sang de mon sang contenté.

宗教戦争や難破のイメージが生み出す非日常的世界と並んで、ディアースの神話的イメージは、*Hécatombe à Diane* の世界を劇的に変容させているのだ。